

うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 48



歴史のなごりを感じさせる
家族憩いの公園

1908年に河南鉄道（現在の近鉄南大阪線）によって西日本で最も古い近鉄玉手山遊園地として開園されました。しかし、入場者の減少で1998年5月31日に90年の歴史を閉じました。約1年間の休園の後、1999年3月柏原市立玉手山公園「ふれあいパーク」として再スタートし、家族の憩いの場として現在に至っています。

後藤又兵衛ゆかりの歴史スポットも

公園のある玉手山付近と石川の対岸にある道明寺付近にかけては大坂夏の陣の激戦地でした。豊臣方の後藤基次（又兵衛）は玉手山に陣を敷



後藤又兵衛の碑（右）と吉村武右衛門の碑
大阪府柏原市玉手町7-1
近鉄南大阪線 道明寺駅下車徒歩約15分

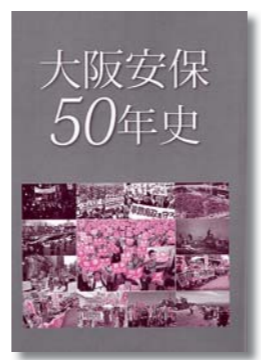
き徳川方と激戦の末、討死しました。享年56歳でした。

後藤又兵衛は、黒田官兵衛・長政父子に仕え、筑前大隈城主として1万6千石を領しましたが、謀反の疑いを受け浪人となります。そして慶長19年（1614年）の大坂冬の陣で、豊臣秀頼の招きで豊臣方に味方し、真田信繁（幸村）らとともに豊臣方五人衆と呼ばれました。

公園内に両軍戦死者の供養塔、後藤又兵衛碑や後藤又兵衛ただれ桜があります。又兵衛の碑の隣に、家臣の吉村武右衛門の碑があります。武右衛門は銃弾に倒れた又兵衛を介錯した人物として伝わり、その後、その首を隠して逃亡し、大坂の陣で死んだ者たちを供養し続けたといわれています。

Culture Navi かるちがーナび

ブック・レビュー



「大阪安保50年史」

過去に学び
これからのたたかいに

結成50周年を迎え、「大阪安保50年史」が発刊されました。330ページにわたる少し厚い本となりましたが、60年安保闘争の国民的高揚の後、安保共闘の再開を求め、「安保破棄」の旗を高く掲げた大阪のたたかひの歴史が記載されています。読まれた方からは「読みやすくまとめられている」と好評です。本書は過去を懐かしむためのものでなく、過去に学びこれからのたたかひに生かすためにと発刊されました。この50年史に刻まれたたたかひ

は、知恵の限りをつくして築き上げた足跡です。それに負けないあらたなたたかひを創出していくために、ぜひ一読を。定価2000円+税で販売しています。
申込み・問い合わせ
安保破棄諸要求貫徹大阪実行委員会
〒543-0014
大阪市天王寺区玉造元町17-22
TEL 06-6763-3833
FAX 06-6763-3836
Email:anpo-osk@abeam.ocn.ne.jp

「測量の日」が6月3日なのは、「測量法」が1949年6月3日に制定されたことに基づきます。測量は、国土の利用や社会資本の整備などの基礎資料となります。1989年、建設省（現国土交通省）が測量法の制定40周年を記念し、毎年6月3日を「測量の日」としました。日本経緯度原点は、東京都港区麻布台2-18-1となっており、水平位置の測量の出発点となるものです。ここは、旧東京天文台のあった所で精密な天文経緯度測定がくり返し行われました。全国の基準点の経緯度は、この値を基準として決定されています。

今月の
記念日
「測量の日」
6月3日

16th Anniversary

「侵略行為」の行く末に注目



マイケル・ムーアの 世界侵略のススめ WHERE TO INVADe NEXT

「シッコ」「華氏911」など、アポなし突撃取材で米国の社会問題を暴いてきたドキュメンタリー監督マイケル・ムーアの最新作。オープニングでは、これまで、銃規制、対テロ戦争、医療保障、資本主義など、アメリカ国内に巣食う問題を取り扱ってきたムーアが、度重なる侵略戦争がよい結果をもたらさなかったことを認めた「米国防総省幹部」に代わって自らが「侵略者」となることを提案。そして空母ロナルド・レーガンに搭乗し、大西洋を越えて様々な国から「世界のジョーシキ」をアメリカに持ち帰るために、略奪に行きます。
たとえば、イタリアやドイツでは、「有給が多くても、労働時間が短くても」「生産性は高く、無駄でない」と経営者も認める人間らしく働く労働法制。スロベニアでは、大学などの高等教育は公益性が高いので無償にして、若者に経済的負担を押しつけないこと。アイスランドでは経営破綻した銀行経営者が逮捕される、チェニジアやアイスランドでの女性の活躍など、これは本当か?!と様々な国で実際に行われている驚くべきことが紹介されています。もちろん、アメリカ型の格差と貧困がすすむ日本にない政策（世界のジョーシキ）ばかりでした。
安倍首相には必ず見てもらい、「人間らしく働く」「教育で若者に負担を押しつけない」などの政治に転換してほしいと、心から思いました。

豊臣秀吉の子飼いの家臣で、「賤ヶ岳（しずがたけ）の七本槍」の一人である加藤清正は、秀吉没後に徳川氏の家臣となり肥後国一国を与えられ、熊本藩主となりました。文禄・慶長の役での朝鮮出兵の際、仲間が清正の陣地を訪れると、占領した地域にもう敵はいないのに清正の軍団が完璧な臨戦態勢であることに驚きました。なぜ装備を外し身軽にならないのかと、仲間の武將が問うと清正は「大将が油断すると、部下も気が緩む。部下の統率は、大将の心掛け次第」と答えたと言っています。

上一人の気持ちは
下万人に通ずる

加藤 清正

心に響く
このひとこと